北方地下式横穴

河　口　貞　徳

1. 遺跡の環境

遺跡地は栗野町北方小屋敷の坂本道男氏所有の畑地およびこれに隣接する内村静夫氏所有の畑地一帯に分布する地下式横穴群である。

国見山地に源を発する川内川が吉松町を南に流れ，栗野町に至って大きく迂廻して北西方向に流れを変じている。この屈曲点の右岸にあたる山麓の畑地に位置し，標高２１０ｍ，南に水田地帯を見おろす良好な立地条件を備えている。遺跡地附近には北方真中馬場古墳群がある。

昭和９年９月，浜川畩助氏畑地に所在した地下式土拡を寺師見国氏が調査している。[1] これによると人骨３体，剣1，鉄鏃２１が出土したと報ぜられ，なおこの他に，「附近の部落には土工中発掘された土拡[3]・円墳多数あり，土拡より甲冑も出土したといわれる。

部落北部の内田友二氏畑地の円墳は昭和１９年梅原博士調査さる」と記し，この地域が古墳群であったことがわかる。[2] 栗野町北方では池ノ川台地・原・堂ノ上・真中馬場中郡などに発見されており，堂ノ上中島金太郎氏畑地では，明治３４年鉄道工事によって土拡数基発見・昭和８年頃土工中凡そ６基の土拡を発見し，真中馬場中郡浜川畩助氏の畑地で数基発見されたと記録がある。このうち中島金太郎氏所有地のものには地下式板石積石室も含まれていることが最近の調査によって推定されるに至っている。

地下式横穴は[4]日向地方に分布する古墳時代の埋葬遺跡であるが，北限は宮崎県西都市の西都原古墳群中に併存するもので，大隅半島の志布志湾沿岸に分布する古墳地帯中に併存するものが南限となっている。この間古墳地帯以外では単独に群集墓を形成するものが多い。

鹿児島県では伊佐郡・曽於郡・姶良郡・肝属郡に分布し，大口市がその西限となっている。本県では今１つの特色がある。古墳時代の埋葬形式として地下式板石積石室があるが薩摩がその分布地域で，川内川流域を南限とし，熊本県人吉盆地，芦北町，天草島本渡市を連ねる線が北限となっている。

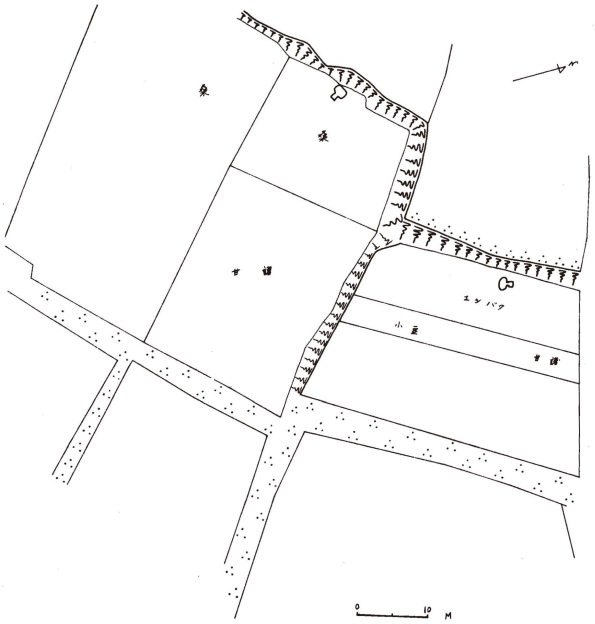
地下式横穴は地下式板石積室と吉松町から大口市に至る川内川上流地域で分布が重なっており，栗野町も両者の併存することが明かになっている。

2. 調　査　経　過

昭和４５年吉松町医師林昭男氏の通報によって遺跡地が判明した。栗野町教育委員会は県教育委員会と話し合って調査を行なうことを決め，昭和４５年５月１９日予備調査を行なった。

依頼を受けた筆者は栗野町教育委員会の肱岡氏の他前記林昭男氏等数名と共に下調査を行なった結果，坂本道男氏畑地内に地下式横穴の存在することを確認し，なお隣接する内村静夫氏畑地においては，昭和３０年に土拡を発見し，人骨３体と刀１が出土し，刀は内村静夫氏が保存していることも判明した。

栗野町教育委員会は予備調査に基づいて，昭和４５年６月５日より６月８日まで４日間の調



第1図 北方古墳遺跡図

査を行なった。

次に調査にあたった者の氏名をあげる。

県文化財専門委員	河口貞徳	吉松町写真同好会々員	池元良治
県社会教育課文化財係長	盛岡尚孝	仝	平野良雄
鹿児島実業高校教諭	林　敬二郎	仝	水谷　浩
鹿児島市南小学校教諭	出口　浩	仝	宮ノ下繁雄
ラサール高校教諭	上村俊雄	仝	山口　勇
栗野町在住	永吉レイ子	仝	池元　徹
吉松町医師	林　昭男	栗野町教育委員会職員	

調査は坂本道男氏畑地の地下式横穴の発掘から開始し，６日から内村静夫氏畑地のものも，残存した構造をたしかめるために発掘に着手した。記述の便宜上，前者を１号墳，後者を２号墳と呼称する。

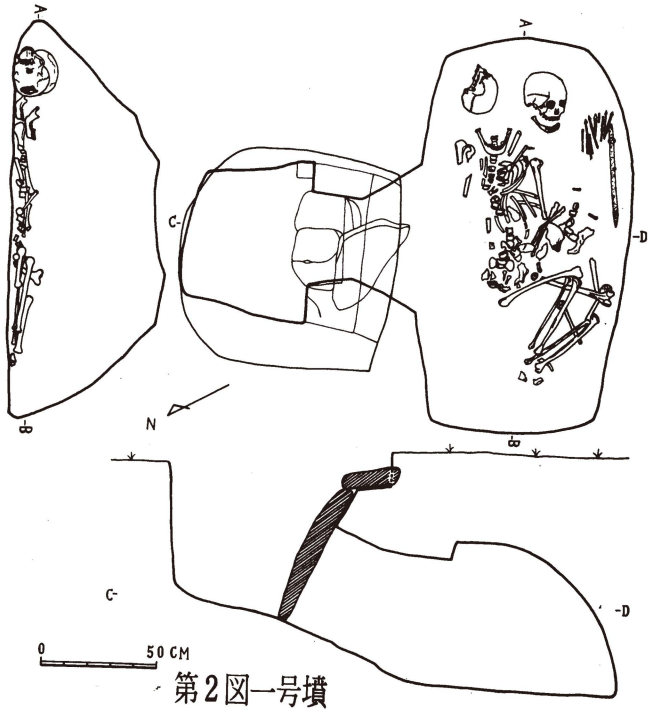
１号墳は玄室内に天井の１部が落下しているほかは，ほとんど完全に保存されおり，天井部に亀裂があり，この部分から雨水が浸入したものとみられ，床面には約１０㎝の厚さに土砂の堆積がみられた。

２号墳は発見当時破壊されていたが，玄室，羨道の底面の形は完全に残されており，入口も半分は残存していた。

なお玄室は天井の１部も残存していて構造を推定する便宜を得た。

3　遺　　構

1号墳



第2図一号墳

1号墳は西隣の1段高い畑の崖下に接近して位置している。

入口は幅94cm，長さ93cmの半円形に掘り下げ，下部へ狭くなり，地表下約60cmの底面では幅70cm，長さ53cmとなっている。入口の底部からわづかに傾斜した羨道によって玄室に通じている。羨道は入口は狭く，奥へ広くなり，入口の幅40cm，高さ50cm，奥では幅64cm，高さ55cmとなっている。玄室は楕円形に近い長方形で羨道は横についている。天井はドーム状をなしているが，天井から横の壁面へかけて，工具の刃跡が歴然と残され，とくに天井は凹凸がみられた。床面においても同様で平担ではなく多少の凹凸がみられた。堀削に用いられた工具は1種類で刃幅8.3cmのものである。

玄室は長径169cm，最大幅90cm，高さは中央部で62cmで，長軸の方向はNW62度である。

羨道と入口との境は板状の自然礫3枚を用いて閉鎖し，入口には土を埋めて地表面には何等の標識も残していない。

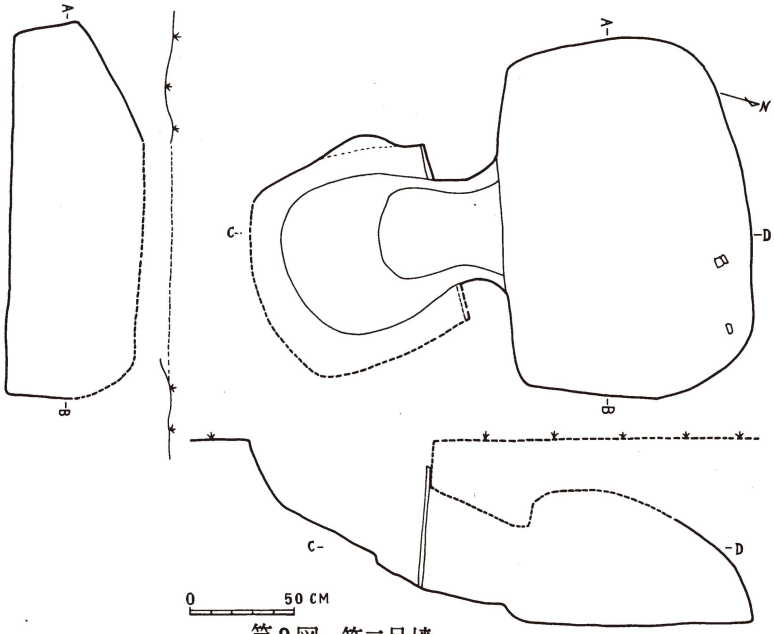
遺跡地の地層は表層20cm，第2層黄褐色火山灰層20cm，第3層黒褐色粘質層40cm，第4層パミスまじり層基盤となっており，第3層の黒褐色粘質層は堅牢で，玄室はこの層に構築されている。

玄室内には東南に頭部をおいて仰臥屈葬された人骨2体が並置されており，奥側のものは頭部がよく残っている外は，脊椎，骨盤の1部と4肢骨の1部が残っているのみであった。

これに比べて入口側のものは保存がよく，脚部を奥側の遺体にもたせかけた状態を示していた。又頭部が転倒して横向きとなり，顔面を東南方向にしていたのは，天井の落盤か水の流入など，いづれにしても後の2次的な原因によるものであろう。

以上に述べた埋葬は玄室床面に直接行なわれたもので，石棺，粘土郭等の施設はみられず，また木棺の使用は，入口及び羨道の規模からみて不可能といえる。

副葬品は，奥側の遺体にそって，奥壁との間に鉄鏃１０，骨鏃３の鏃の束と，剣１振が出土した。



第3図　第二号墳

２号墳の形状も１号墳に類似したものである。入口から，傾斜した羨道を通じて，1段低くなった玄室の床面にはいる構造といい，入口と羨道との境を板石によって閉鎖しており，玄室の横に羨道を設けている点などまったく同様である。玄室の形状は楕円形に近い長方形であり，天井も１部残存した部分から推定してドーム状であったと思われる。ただ規模の点では１号墳よりやや大きい。入口は，幅約１００cm，長さ約９０cm，玄室は長さ１７０cm，幅１２０cm，羨道は長さ約３０cmである。

発見時に人骨は木箱に入れて埋めもどしたといわれていたが，少量の遺骨が発見され，３個体のものであることが判明し，そのうち小児の頭骨の１部が発見されたことによって，埋葬遺体３体中，１体は小児であったことが判明した。

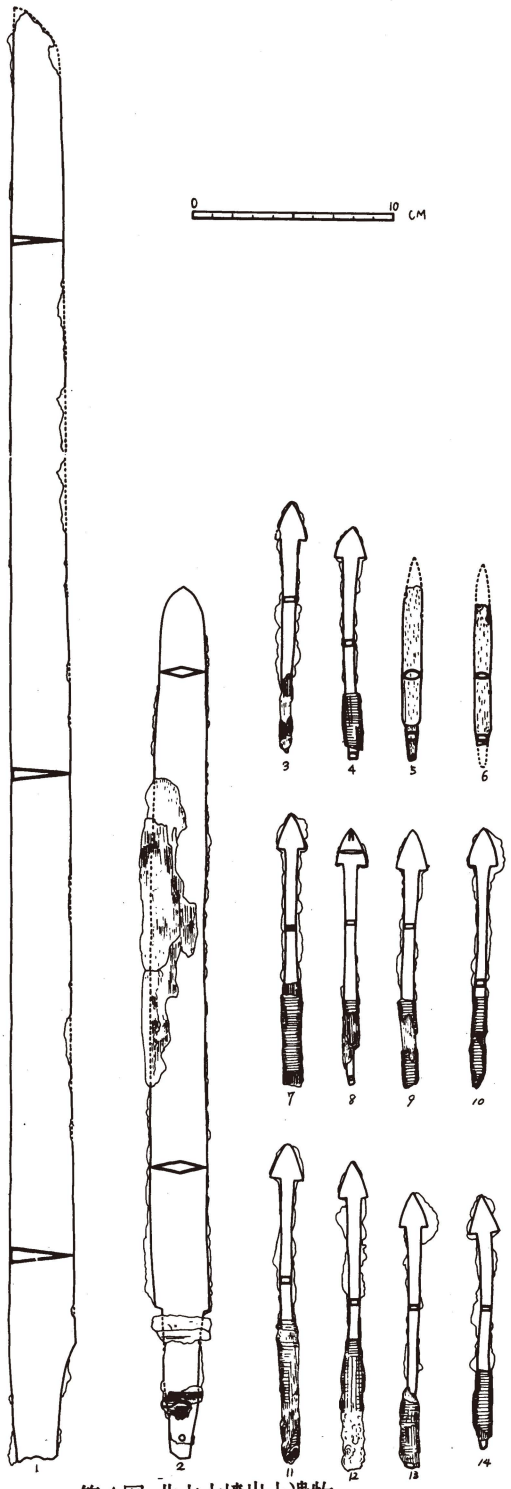
4. 遺　物

刀　第４図１は２号墳出土の刀である。刀身は６３cm，茎は１部が欠損して大きさは不明である。

平脊　平造りで，片そぎ関となっている。

剣　第４図２は第１号墳出土の剣である。身の長さ３６cm，関より７cmのところで厚さ６mm剣尖より４cmのところで厚さ５mmである。茎は長さ7.5cm，目釘穴１個を有する。身には鞘の残存と思われる木質が付着しており，茎は組紐で巻かれていたことを示している。

鏃　第４図3，4，７～１４は第１号墳から出土した鉄鏃である。平根系統の三角形鏃で，全部同一型式で小型のものである。箙(のかつぎ)被を有し，箙の着装には桜皮を用いており，茎に付



第4図 北方古墳出土遺物

着した箆の木質部（竹か？）と，巻いた桜皮の残存がみられる。

第4図5，6も第1号墳出土の骨鏃である。

他に1個あったが腐蝕していた。長さは推定10cm，身と箆代にわかれ，箆に着装して使用したものであろう。

5. むすび

地下式横穴は地下式土拡とも呼ばれ，前述のとおり日向地方に分布する特殊な埋葬である。

発見者数は宮崎県95,(5) 鹿児島県51(6)となっているが，実数ははるかに上廻っているものと思われる。宮崎県海岸地域および鹿児島県志布志湾沿岸では畿内型の高塚古墳と混在しているが本質的に異なるものである。

構造は入口（竪穴）と羨道（入口から玄室へ通ずる穴）と玄室（遺体を納める室）からなっており，これらを地下に構築して，地表に何等の標識も残さない。

玄室の形態と羨道の取付き場所によって数種に分類できる。

玄室の形としては床面の形に長方形と楕円形があり，前者の場合は屋根形（天井形）が平天井・切妻屋根・寄棟の３種があり，後者はドーム状である。

羨道の取付き場所には玄室の長い壁に構築したもの（横口または平入り）と，短い壁に構築したもの（縦口または妻入り）とがある。

玄室の楕円形のものはドーム状で，平入りとなっているが，玄室が長方形のものには妻入りと平入りがあり，屋根型も種々である。

日高正晴氏は３様式に分類している。これによると，(7)

第１様式　玄室が長方形で大きく，床面の中央に凹み床があり，天井は切妻が多く，妻入りのもので，古墳時代中頃および中期より後期への過渡期としている。

第２様式　規模が小さく，玄室は長方形で，平入りであるが天井形は不明である。古墳時代後期としている。

第３様式　玄室は楕円形で，平入りである。規模は第２様式より小さい。古墳時代末期としている。

日高氏は副葬品によって時期の判定をしているのであるが，地下式横穴の型式にも天井形の不明なものがあり，又主として宮崎県の資料にもとづくものであるなど資料不足のきらいもあるので，今後資料を加えていったならば，より精密な様式分類ができるものと思われる。

地下式横穴の構造の１部として，閉塞の方法と，玄室内の粘土郭，石棺の有無の問題がある。これには地域差がみられる。宮崎県北部では羨道入口を軽石礫で閉塞するものがみられ玄室床面に凹み床を設けるものがある。鹿児島県志布志湾沿岸では羨道を閉塞するのに黄褐色土塊を用い，玄室内には軽石を加工した板石の組合せ石棺を収めている。

伊佐郡，姶良郡北部あるいはえびの町方面では，入口を板石で閉塞するもの，あるいは羨道入口を板石で閉塞するものが多く，玄室内には特別の構造物を有せず床面に直接埋葬するのが普通である。

本遺跡の地下式横穴は日高氏の第３様式にあたるもので，大きさの面からいっても最も小規模である。１号墳では副葬品に短剣と三角式の鏃の外に骨鏃をまじえるという特殊なものである。日高氏のいうように古墳時代末期とするにはやや古いものと思われる。後期とすることが適当と思われる。第２号墳も大体同一時期と思われるが，１号墳より多少下るものであろう。

１号墳は２つの遺体の埋葬が行なわれ，２号墳では３体の埋葬であることが判明した。１号墳の場合は奥側の人骨は腐蝕度が相当に進んでおり，副葬品もこの遺体に付属したものと思われるが，入口側の人骨はかなり原形を保っていて後に埋葬したものと思われる。

２号墳の場合も同時埋葬ではなかろう。同じく北方の真中馬場の土拡では３体分の頭骨の埋葬が行なわれ，うち２体の頭骨は北東壁附近に並び，頭骨に沿って北側の頭骨には鏃と剣を，東側の頭骨には鏃を副葬しているが，今１個の頭骨は前２者と反対側の壁附近に，方向も反対方向にむけられており，副葬品もみられない。この例でも同時埋葬とみることはできない。以上のようにみてくると地下式横穴では追葬が行なわれたことがわかる。

地下式横穴が畿内型古墳文化の末流でないことは，南九州に高塚古墳文化の伝播する以前に地下式横穴の発生が推定されることからもわかる。その分布圏は日向隼人の居住地域に一致し，隼人族の間に発生した独特の埋葬法であったと思われる。

南九州の気候，風土あるいは地理的位置などの自然環境や，文化流入の血脈となった古代の幹線交通路からそれていたことは，あたらしくおこった農耕文化とそれに伴なう社会制度の吸収には必ずしも有利であるとはいえなかった。

前時代以来の部族共同体がいつまでも南九州に残存したのは前記のような条件によるものであろう。1部に高塚古墳を有しながら，それと共存し，あるいは単独に地下式横穴の埋葬をまもり続けたことは，日向隼人の社会のあり方を端的に示すものといえよう。

終り

註

(1) 寺師見国　鹿児島県文化財報告書　第4集

(2) 仝(1)

(3) 土拡，地下式横穴のこと

(4) 旧い日向・大隅を含む

(5) 石川恒太郎　宮崎県の考古学

(6) 鹿児島県教委　鹿児島県遺跡地名表

(7) 日高正晴　考古学雑誌第43巻第4号